堺から世界へ

Sakaiから Sekaiへ

母校は来年、創立120周年を迎える
自由な校風とチャレンジ精神の伝統を受け継ぎ
多くの同窓が海を越えて世界を舞台に活躍してきた
折しも、母校は「スーパーグローバルハイスクール」の指定を受けた
今回は、様々な分野で国際的に活躍している三丘生の何人かを紹介することにした

【外交や国連の現場で】

■外交の現場で、歴史が動く瞬間を見てきたのが**津守滋**さん（高10回）。京大卒業後、法務省を経て外務省入省。在ソ連大使館参事官、在ドイツ大使館公使などを歴任。ペレストロイカなどの大改革や、チェルノブイリ原発事故発生のときはソ連にいた。東西ドイツ統一はドイツ在任時のことだった。11年に民政移管したミャンマー情勢は、当時の変化の激しさを思い出させると津守さん。2000年から02年に、駐ミャンマー大使として、軍政首脳との信頼関係を保ちながら、アウン・サン・スー・チー氏とも何度か対話した経験がある。離任後もミャンマーの動向を注視し続け、「ミャンマーの黎明」を1月に上梓、ミャンマーの発展に期待を寄せている。

■国際機関で長きにわたり政策立案に従事したのが**西本昌二**さん（高16回）。阪大卒業後、ハワイ大学大学院で国際貿易論や開発学を学び、アジアにおける開発の重要性を実感したという。国連アジア太平洋経済社会委員会、国連食糧農業機関を経て、マニラのアジア開発銀行本部に22年間勤務した。97年のアジア通貨危機の際に実施した韓国・インドネシア向け緊急援助プログラムは、特に印象に残るという。02年からは国連開発計画（UNDP）開発政策局長を務めた。国際機関で働くことの魅力を「やればやっただけの成果が認められフェアな評価を受けられる」と語る。07年4月から14年3月まで、関学大総合政策学部教授。母校SGHのアドバイザーでもある。

西本昌二さん

■**玉村美保子**さん（高32回）は、国連に勤務して25年になる。「国際的な仕事がしたい」と京大卒業後、ロンドンに留学。89年に国連ニューヨーク本部に赴任。国際原子力機関、平和維持局などを経験。もっと現場を見られる仕事がしたいと「飢餓と貧困の撲滅」を使命とするWFP（国連世界食糧計画）を志望。日本事務所代表を経て、08年から4年間、WFP代表としてインドに赴任。慢性的な栄養不良により国民の7割が受けている公共配給食糧が、確実に住民に届くのを確かめるため生体認証システムを導入、画期的な成果をあげた。現在はWFPのローマ本部に勤務、在ローマ国連機関・世界食糧安全保障委 担当部長の要職にある。

玉村美保子さん

■フランス在住の**村上節子**さん（高22回）は国際会議に欠かせない同時通訳として活躍する。阪大から東大大学院に進み、フランス文学を研究していたが、パリ第三大学に留学中「OECDの同時通訳をしてみないか」と誘われ、やってみたところ「まさに血湧き肉踊る体験、その楽しさが忘れられず」38歳で通訳養成学校ESITに入学、本格的に通訳の勉強を始めた。その後順調にキャリアを重ね、1994年の天皇・皇后両陛下のフランス公式訪問の際は1週間、皇后陛下の通訳を務めた。「フランスは制度面でも国民の意識面でも女性にとって働きやすい国。これからも仕事を続けたい」と話す。

村上節子さん

【世界の人とつながって】

■**竹野内勝次**さん（高14回）は、阪大で二値論理代数に魅せられ日本IBMに入社。60年代後半に日米を往復して技術を習得、日本初のコンピュータの量産化を率いた。その後ソフト技術者に転向し、NASAのプロジェクト管理技法を国内に導入した。退職後、モンゴルを訪問。現地の大学で毎年集中講義を行い、IT技術指導や技術者協会設立の支援、留学生のサポートなど日蒙交流に尽力している。（モンゴルの大学で学科長（左）と）

■青年海外協力隊に参加したいと看護師になった**杉江美子**さん（高30回）は、進むべきは公衆衛生だと保健師の資格も取得した。マレーシアで協力隊の活動を経験し、89年にはNGOの看護師として、カンボジアの母子保健センターへ。「国際援助とは何かを考え続けた1年9カ月」だったという。NGO代表の本田徹医師は「鋭い問題意識や行動力が記憶に残る」と書いている。

カナダに移住して、02年からトロント市保健局に勤務。社会的困難に直面する母子家庭を対象に家庭訪問や育児相談を担当、地域と連携した支援を担ってきた。12年7月から休暇を使って約1年間、石巻で仮設住宅の訪問活動にも従事した。

■**森川（花田）久代**さん（高21回）は50歳で教員を早期退職して、海外でのNGO活動へ。生徒たちが興味ある新聞記事を発表する場があり、その中で障害を持つ子供への理解を深めたことがきっかけだった。01年から、ラオスで日本人専門家による車椅子製造研修などの障害者自立支援や、視覚障害者への音楽演奏による支援を行い、07年からラオスやカンボジアで、不発弾や地雷の処理活動を支援する団体に勤務した。12年からは台風や洪水が毎年のように発生するベトナム・ダナンで、防災教育実践の支援を行っている。（写真はラオスの子供たち）

■この他に、過去の同窓会報でも紹介した「アジア・アフリカ諸国に長期滞在し、医師として国際協力に関わった」元国立国際医療センターの**吉武克宏**さん（高15回）、「アフガニスタン・カンボジア・ミャンマーの戦災孤児や子供たちの支援をしている」**堀川（中野）ひろ子**さん（高19回）、「職場の仲間とNGOを立ち上げ、ネパールで学校建設支援を行っている」**野田隆史**さん（高32回）らがいる。

【学術・研究の分野でも】

■高校時代、金井次郎先生の化学の授業に触発され、東北大で化学を専攻した**増原宏**さん（高14回）。阪大院を経て91年阪大教授。微小領域の化学反応をレーザーで制御しながら進めるレーザーナノ化学という新領域を開拓。英ポーターメダル、紫綬褒章などを受賞。

増原宏さん

ベルギー王立学士院フェロー、インド国立科学アカデミー会員。現在も台湾国立交通大學で終身講座教授として第一線の研究室を主宰。サイエンスを通じて世界中に友人を持つ幸せに感謝していると語る。

■母校SSHの指導主任である京大院生命科学研究科教授・**竹安邦夫**さん（高21回）は、神大卒業後、阪大医、コーネル大、ジョンス・ホプキンス大、バージニア大などを経て現職。原子間力顕微鏡を使い、DNAやたんぱく質などを生きた状態で見る手法を開発。11年には共同研究でリボ核酸とタンパク質から成るナノサイズの三角形構造体の創製に世界で初めて成功。新しいがん治療法に発展することも期待されている。本年5月から日本学術振興会ロンドンのセンター長に就任した。若いときから海外の人とディスカッションしながら研究することも大事と語る。

竹安邦夫さん

■**肥田晴三**さん（高23回）は米UCLAの数学科の教授。京大で、化学専攻を希望したが、学生運動のため授業がなく、独力で学べる数学に変更。北大助手を経て、世界で最も優れた学術研究機関の一つと言われるプリンストン高等研究所に招聘され、その後パリ大を経て現職。360年もの間、証明できなかった数学の難問「フェルマーの最終定理」を94年にワイルズが証明した際、肥田さんの研究も使われたそうである。整数論の分野での肥田理論は世界的に有名である。

肥田晴三さん

【堺から宇宙へ】

■日本人で初めて宇宙での船外活動を行った**土井隆雄**さん（高25回）は、24年間の宇宙飛行士に区切りをつけ、09年から国連宇宙部（ウィーン）で、宇宙開発の成果を世界に広め、平和に貢献する仕事に携わっている。

■土井さんが08年に船内保管室を取り付けたのが国際宇宙ステーション・日本実験棟「きぼう」である。その「きぼう」の民間人初のフライトディレクタが、有人宇宙システム(株)の**土田哲**さん（高34回）。24時間・365日宇宙飛行士の安全を確保するために、膨大な情報を的確に処理し、地上から指示を送る。宇宙飛行士の能力を最大限引き出すために、時には宇宙飛行士の悩みにも耳を傾け、ミッションの成功を陰で支えている。

人や物を軌道上へ輸送するための「宇宙エレベータ」研究の第一人者でもある。

■**松居隆之**さん（高34回）は、チリの標高5000メートルの高原に建設されたアルマ望遠鏡の制御を担当する。アルマ望遠鏡は直径7～12メートルのパラボラアンテナ66台を組み合わせた巨大な望遠鏡で、国際共同プロジェクトとして、02年から建設が始まり、13年に開所式が行われた。100トンのアンテナ相手では、国内で駆動試験ができず、07年に現地で初めて接続して、アンテナが指示通り動いたときは非常にうれしく感じたそうだ。

■**黒田安紀子**さん（高12回）はイタリア在住のソプラノ歌手。70年の第1回「イタリア声楽コンコルソ」（日本イタリア協会主催）で優勝し、ミラノ国立学院に留学。プリマとしてヨーロッパ各地の有名歌劇場に出演、日本人で初めてミラノ・スカラ座の舞台に立った。夫君は世界的テナーのアルベルト・クピード氏。現在、後進を指導しながら、クピード氏のマネージャー役を務めている。渡伊のきっかけとなった「イタリア声楽コンコルソ」の審査員を夫妻で務めるなど来日の機会も多い。

■スイス在住の**今村泰典**さん（高24回）は、世界屈指のリュート奏者。スイス・バーゼル市立音楽院を卒業後、世界各国の音楽祭に招かれ、数多くの著名な音楽家と共演している。CDも130枚以上録音し、ディアパソン・ドール（ディアパソン誌賞）やスイス・ソロトルム州文化功労賞など受賞。アンサンブル「フォンス・ムジケ」主宰。仏ストラスブール国立音楽院リュート科教授、独フランクフルト音楽大学リュート科講師として後進の指導にもあたる一方、世界各地でマスタークラス（公開レッスン）に招待されている。

今村泰典さん

■母校創立百周年記念演奏会のコンサートマスターを勤めたバイオリニスト**渡辺りえ**さん（高40回）。子供の頃、著名なバイオリニスト黒沼ユリ子さんに褒められ音楽を続けた。高校時代にメキシコの「アカデミア・ユリコ・クロヌマ」に留学、母校卒業後、再びメキシコへ。89年にメキシコ国立自治大主催の「若きソリスト」コンクールで優勝。米ジュリアード音楽院、ウェスタンイリノイ大などでも学んだ。07年にマヤの伝統音楽に魅せられ、先住民ロックグループに加入、メキシコ国内外でコンサート活動をしながら、後進の指導にもあたっている。

【こんな分野も三丘生】

■日本のシンクロナイズド・スイミングの草分けのひとりが、**西（後藤）通子**さん（高13回）。高校1年でシンクロを知り、若手に交じって本格的に練習を始めたのは18歳、冬場のプールを探す苦労もあった。65年の日本選手権でソロ・ペア・チーム全てに優勝、浜寺水練学校による1位独占の立役者となった。翌年、アメリカ遠征が実現、本場のシンクロに衝撃を受けながら全米を回った。70年に日本で初めて開かれた国際試合ではコーチをつとめた。その後、カナダに移住、日本チーム遠征時には通訳などの支援にあたってきた。

■**平木裕実子**さん（高26回）は、30年にわたりカナディアンロッキーを仕事場にしている。数年間の教員生活の後、スキーや登山技術を学びたいとカナダに移住、バンフでツアーガイドとして働く。ハイキングから山岳スキーまで、オールマイティのガイドとして指折りの知識と経験を持ち、プライベートでも田部井淳子さんとのヒマラヤ遠征をなど豊富な実績がある。11年から夏場の国立公園スタッフとして、自然や動物との共存に目を配る。「英語国でも生きていける土台を仕込んでくださった原口俊雄先生に感謝です」とのこと。

平木裕実子さん

◆今回、学年幹事のみなさまから多数の情報をいただきました。厚くお礼申し上げます。紙面の都合で、そのうちほんの一部しかご紹介できず、大変残念で心苦しく思いますが、どうかご了承お願いいたします。